
Christmas songs

雑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Christmas songs

【Nコード】

N7388Y

【作者名】

雑

【あらすじ】

クリスマスにちなんだ連作の恋愛短編集
一話完結。

これも、昔やってたサイトからの発掘品です。

01 元先生×元生徒

02 ブラコン小学生とその兄

03 友達の兄×女子高生

順次あげていきます。

「これ、何入れてたかな」

大掃除も兼ねた引越し準備をしていたら、何が入っているのかわからないダンボールが押入れの一番奥から出てきた。

開けたダンボールから出てきたのは衣類。それも、10年近く前の中学生とか高校生とかの時に来ていたものだ。

「うわ、懐かしい」

基本的に私の服はシンプルカジュアルだからサイズさえあれば今でも充分着れるモノばかり。オーソドックスなものって何年経ってもそれほど時代を感じさせない。

アンゴラのタートルネックのセーターやら、タータンチェックのボックススカート、白いふわふわのモヘアのカーディガン……うーんちよつと少女趣味だわ。この頃の服ってママの趣味が多分に反映されているからな。

「まるで店開きだね……」

深みのあるバリトンに振り返った。

「……先生、いつ来たの？」

廊下のところでどこか所在なさげに部屋を覗き込んでいたのは、先生だった。

先生って私が呼んでいるのは、彼の職業が中学教師だからだ。

フルネームは、森宮幸彦。

あと一ヶ月足らずで旦那様になるはずの私の婚約者。

「今。玄関でお義母さんに会ったら、葵が大掃除してるから手伝ってあげてって言われてね」

「……先生のところに持つてく荷物と捨てるものと置いてくものをわけてたの」

生まれて22年。さすがに物はたまる。

小学校から短大までの教科書やらノートやら衣類……それからいわゆる雑貨なんかも。困るのは人形とかぬいぐるみの類だ。捨てるに捨てられない。

「葵は物持ちが良いね」

小学生の時の図画工作の絵やノートなんかを見て、先生は笑った。その笑い方が私は嫌いじゃない。

「捨てるに捨てられないの。これでもだいぶがんばったのよ。綺麗な包装紙やらリボンやらかわいい缶とかは全部捨てたんだから」

お菓子の缶とかってかわいいのあるでしょ。デイズニーのなんかは特にそう。私はそういうの捨てられないタイプなの。つい、何かに利用できるんじゃないかと思ってとっておくタイプ。再利用の機会はまずないんだけどね。

「……そのスカート、一番最初のデートの時に着て来たね」

先生が指差したのは、千鳥格子のプリーツスカート。

「うん、そう。少しでも大人っぽく見えるようにと思ってママにねだって買ってもらったの」

あれは中学を卒業して1年くらいだった、高校1年生の冬だった。先生は当時、26歳。私はやっと16歳。年の差は実に10歳もあった。

22歳と32歳の今ではそれほどでもないけれど、16と26の10歳はまるで違って感じられたものだ。

「僕とのデートの為に？」

「うん、もちろん。だって最初で最後だと思ってたから……」

私は、先生が赴任してきて最初に受け持ったクラスの生徒だった。そして、先生が送り出す初めての卒業生。

先生が初めて朝礼で挨拶したその瞬間から好きで、どうしようもなく好きで……でも、卒業するまでそんなこと一言も言えなかった。若い男の先生なんてあんまりいなかったからすぐに先生にはファンクラブができたんだけど、そのファンクラブに入ることすらできなかった。

「最初で最後って？」

「だって、先生が私みたいな子供と本気でつきあってくれるなんて思ってもみなかったし」

内気だったこともあるけれど、誰にもその気持ちを言えなかった。当の本人にさえも。

その時の私にできたのは、ただ良い生徒でいることだけだった。

だから、一生懸命勉強して、特に東吾の教える国語ではいつもがんばって……クラス委員とかに立候補することもできなくて、ただ毎日こつそりと黒板や教壇を掃除していた。そのことを先生が知っ

ているなんて思っても見なかった。

「……子供ね……」

先生はどこか苦い笑いを浮かべる。

「だって、先生、すごく大人に見えたもの」

「そんなことないよ。男は何歳になってもガキだっていうしね……」

先生は空いていたスペースに足を庇うようにして座る。以前、傷めたという足はまだ冬になると少し痛むらしい。

「葵は充分大人だったよ。少なくとも、君は他の子達とはまるで違っていたし……」

「違っていた？」

「ああ。君はいつも僕の目をまっすぐと見ていたから……いつも、心の奥底まで覗かれている気がしてたよ」

正直、苦手だったんだと先生は言う。

「じゃあ、なんであの時、初詣に誘ってくれたの？」

「……なんでかな。自分でもよくわからない」

先生はいつもの薄い笑みを浮かべた。この笑みをしている時は絶対に関心がある証拠。でもあえて重ねて問う事はしない。話していることなら先生はきくと話してくれるから。

そう、今でも忘れない。

クリスマスデコレーションがきらめくカップルで溢れた街の中、階段でコケそうになった私を抱きとめてくれたのが先生だった。

『危ないっ』

ちょうど雨がやんだばかりで地下への階段はすべりやすくなっていた。

『……あ、ありがとうございます……』

後ろから抱きとめてもらった私は、大怪我を免れた。

お礼を言っつて、重ねて頭を下げようとした私の目に入ったのは、先生だった。

『森宮先生……』

卒業して1年近くが過ぎていた。

『佐伯……』

もちろん、先生とは会う機会なんてまるでなくて、卒業して以来でも、先生はちゃんと私の名前を覚えていてくれた。

『元気そうだね』

『……先生も……』

家に帰るといふ先生と私は同じ電車だった。一緒にキップをかつ

て、それから最寄駅までの20分間、電車の中でいろいろな話をした。って言っても、それほどたくさん話をしたわけじゃない。

私は先生に再会した喜びでかなり舞い上がっていたし、元々口が回る方じゃない。そして、先生もそれほど饒舌な方ではなかったから。

それでも、高校の話や、卒業した後の学校の話なんかをした。

高校は第一志望の学校に合格していたし、授業も部活もうまくいっていた。友達だってちゃんとできていたし毎日が楽しかった。

ただ、先生がそこにいないことを除けばすべてが順調だった。

きっと先生は私のことなんてあんまりおぼえていないだろうなと思っていたから、先生が意外に私の事を知っていてくれて嬉しかった。

『……ああ、そういえば、一つ忘れていた事がある』

『忘れていたことですか？』

『そう。佐伯さん、いつも黒板と教壇の掃除をしてくれてありがとう』

その瞬間、私の心臓は3秒くらい止まったと思う。もう、涙が出そうなほど驚いた。

知られているなんてずっと思ってもいなかったから、頭の中は大パニック。

『本当は卒業の時に言おうと思っていただけ、言いそびれてしまってたね……』

そう笑う先生の笑顔に目が潤んだ。

『……佐伯さん？』

『……何でも、ないです』

もう胸がいつぱいだった。この瞬間、もう死んでもいいと思うくらい嬉しかった。涙が溢れてしかたがなかった。何も言えないでただうつむいてしまった自分をはがゆく思ったけど、先生はそんな私の頭をぽんぽんと撫でるように軽く叩いた。

『……良ければ、初詣に一緒に行かないか？』

驚きのあまり涙が止まってしまった私は思わず先生を見上げた。

『ちょっとした穴場の神社があつてね。帰りにしょうが湯を奢るよ』
『しょうが湯？』

『そう。結構おいしいよ。関西では結構ポピュラーみたいだけどね』
こっちでは珍しいみたいだなとのんびりと先生が言った。

『はい』

思いつきりうなづいた。

カレンダーにつけた丸ジルシを怪訝そうに見るママとパパには友達と初詣に行くからと嘘をついた。それは、私がパパとママについた初めての嘘だった。

「……あの白いコートはどうしたの？」

「たぶん一緒に……」

ダンボールの奥から出したのは白いコート。
ちよっとお嬢さま風のマントみたいなデザインをしているファー
付のコートは、当時の私のお気に入りだった。

「……本当に懐かしいな」

先生は目を細める。

もちろん、何度もデートにも着ていきましたとも。私のお
きだったし。

「先生、てるてる坊主って言ったよね」

あれは付き合い始めて何回目のクリスマスだったか……そのコ
ートを着ている日はいつも雨が降らないよねと言った先生は『てるて
る坊主みたいだ』と笑った。

「……あれは言葉のアヤでね……まだ根にもってるのかい？」

困ったような表情をする。

「だってショックだったんだもの」

その言葉にショックを受けた私は、せつかくのデートも全然楽し
めなくて、最後には涙が出たものだ。

「あれには参ったよ。そんなことくらいで、まさか泣かれるとは思
ってもみなかったし……」

「先生は、女心が全然わかってないんだから……。好きな人の前で
は一番かわいい自分でいたいでしょ。それをてるてる坊主なんて言

われたらショックで泣きたくなるのも当然だわ」

「……いや、僕としてはかわいいからそう言ったつもりだったんだけどね」

「でも、言うにも事欠いて、てるてる坊主はないでしょう。私、あれほどショックだったこといまだかつてないもの」

少しだけ拗ねてみせる。

「……ごめん」

この一件は先生をかなり反省させた。今でもこれを持ち出すと、問答無用で先生は折れてくれるくらい。

「もうとっくに許してます」

反省する先生の様子がおかしくて思わず笑ってしまう。

「代わりのコートも買ってもらったし」

「あれ以来、葵、そのコート着てこなくなったからね……」

「すごくお気に入りだったけど、もう子供っぽいのかな……と思うて。中学の時から着ていたし……」

ちゃんとクリーニングに出してから仕舞っておいたからシミにもなっていないし、カビくさくもない。

「……それ、どうするの？」

「ん。従姉妹にあげようと思って。来年、中学生になる従姉妹がいるの。すくすくかわいい子だね。似合うと思うのよね、このコート」

「へえ……」

「本当に、何か、お人形みたいにかわいらしい子なの」

「昔の葵みたいに？」

先生が真面目な表情で言うから、私は一瞬絶句した。

「……な、何言うかな。もう、先生のバカ」

たぶん、耳まで真っ赤になっているだろう。先生は、真面目な顔でしれっとこういう恥ずかしい事を言うから困る。

「だって、中学の時の葵もお人形みたいにかわいらしかったよ」

「嘘っ、それは先生が目が悪いんだよ」

「嘘じゃないって」

睨みつけた私の目をまっすぐと見て、先生がすごく優しく微笑むから、私はもうどうしようもなかった。お手上げ、どうにでもして下さいって感じ。

そっとその手が私の頬に触れ、どちらともなく顔を寄せる。

ゆっくりと目を閉じて、それから、唇だけに集中する。

全身の感覚が唇に集まったかのように敏感になっていて、重ねられたその柔らかな感触にうっとりとした。

ついでに優しいキスを何度も繰り返す。

「だめ、先生。食事に遅れちゃう」

あいにくイヴもクリスマスもレストランの予約が取れなかったの
で、私達のクリスマス・ディナーは1日前の23日……つまり、今日。
明日は私が、明後日は先生が、先生の家で腕を振るう予定なの。

「それは、残念」

名残惜しげに先生はそつと唇を離す。深い口づけに、あやうく意識が飛びそうだった。

「お茶でもいれるから、下で待つて。先生と一緒に気が散って片付かない」

「そりゃあ、ひどいな」

「だって、このままじゃ本当にレストランの時間に間に合わなくなっちゃう。だいたい、片付けなんかより、先生といるほうが絶対にいいもの。人間は心が弱い生き物だから、絶対に易きに流れるのよ」

「僕は易きなのかい？」

「そういう理屈言わないで下さい」

「はいはい。姫君の仰せのままに」

「もう」

先生が冗談めかして笑うその顔が、すごく好きだと思った。その顔を見る事が出来るのは私の特権だった。

「……………ああ、そつだ、葵」

一緒に階段を降りながら、先生に呼ばれる。

「なあに？先生」

「そろそろ、『先生』は止めにしようよ」

先生はくすつと口元に笑みを零す。

「何かいけないことをしている気分で、それも悪くなかったんだけど、僕はもうとっくに君の先生じゃないわけだし……………」

「そ、そ、そうなんだけど……………」

それはずっとわかっていたの。でも、雨宮さんなんて呼べないし……名前で呼ぶなんてもつと無理。

「言っておくけど、『森宮さん』なんて呼ばないようにね。君だつてあと一ヶ月もすれば森宮さんなんだから」

「じゃあ、何て呼ぶの？」

「そりゃあ、名前じゃないかな？一応聞いておくけど、僕の名前知ってるよね？」

「当たり前だわ」

「じゃあ、呼んでみて」

わくわくと期待に溢れた眼差しで先生が私を見る。

その瞳は、好奇心に満ちた少年のよう。

ああ、男は何歳になっても子供ってこういうことを言うのかしら……なんて絶対絶命の窮地に追い込まれた私は頭の片隅で考えたりした。

先生はとっても気の長い人だった。

根負けをねらっても絶対に私の負けなの。

だから最初からそんなことはしない。

それに、ずっと名前を呼ぶ練習だとしてたの。ちゃんと名前で呼びたいと思って。ママとパパには呆れられたけどね。

「葵？」

その声は優しくかったけれど、でもある種の強制力でもって先を促がす。

階段の途中で足を止めた私を見下ろす先生の笑顔は、残酷なまでに優しい。

「……幸彦さん……」

覚悟を決めて、その名前を舌にのせた。

大切な大切な名前。

まるで万能の魔法の呪文のような。

語尾がわずかに震えた。

「きゃっ」

照れくさくって急いで下まで下りようとして足を滑らせる。
背後からしっかりと抱きしめてくれた力強い腕に、思わずすがりついた。

「……まったく、片時も目を離せないね、葵は」

「ありがとう……」

「どういたしまして。でも、別にお礼を言う必要は無いよ」

「えっ？」

どういう意味なのかわからない。

「だって、もう僕の物みたいなものだろう」

「……先生？」

その笑顔に、何か含みを感じたのは私の気のせいなのかな？

「……幸彦、だよ」

優しく言い諭す口調はいつもと変わらないけれど……。

「今度から、『先生』って呼ぶたびに罰ゲームしようか？」

「罰ゲーム？」

「そう」

先生はそう言って、顔を近づける。

どこか遠くでジングル・ベルが聞こえていると思いつつ、私は目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7388y/>

Christmas songs

2011年11月22日02時56分発行